

ウィリアム・アーヴィン著

ウォルター・バジョット (8)

訳 渡 辺 弘
立 川 順 子

第 7 章 批評理論

批評に対するバジョットの何気ない言及の中には、それに携わる者の遠慮と解釈されないこともない反発の調子がみられる。彼は芸術の価値と芸術が喚起する関心の程度双方に関して、いくつかの深刻な疑念を抱いていたように思われる。彼自身、従事していた批評活動に関して、彼は次のように発言しているが、われわれは意外な感に打たれない訳にゆかない——「多くの有能な人間が実際、それに没頭している」¹⁾。バジョットは批評とは退屈なものであると述べており、「面白味が乏しいものであるから、長々としたものにはなれないという理由で……簡潔なものであらねばならない」と言明している。彼の最も奇抜な主張は「悪であるとしたら、批評は必要悪である」¹⁾ というものである。この言葉には、実利主義的なイギリスの大衆を博識、知性的なアテネの貴族に改造したいという願望は明らかにない。何百万もの悪書を読んでいる何百万人という無知な国民という光景は、教養面における使徒聖パウロ的人物、もしくは文学におけるエレミアのような人物にならんとする熱情をバジョットの心に吹込んだものではなかったことに明白である。何故なら、アーノルドの中に抑圧され、倒錯した実利主義があったのなら、バジョットの心には、あからさまで健全な実利主義の傾向があったからである。バジョットは、とどのつまり、行動家、実務家であり、終日、確固として手ごたえのある様々な現実とかかわっていた人間であった。実務や予算と比べたなら、書物、作家、批評家とはいか

なる存在であろうか。作家とは静かな部屋に坐って、外の喧騒に満ちた刺激的な世界の影を入念に倦むことを知らずに作り上げてゆく人間以外の何者であろうか。批評家とは、そのような影について注釈を加える人間、つまり、作家達について書く人物でなくして何であろうか。いかに卓越したものであれ、文学は所詮、模倣にすぎない。批評は模倣に関する考察にすぎないから、現実から二重に隔絶されているものである。これらは行動家にとって至極当然の見解であり、バジョットにしては奇異なように思われるが、彼が時としてそのような考えを抱いたであろうことを明示するものがいくつか残っている。バジョットが歴史の目的を怠惰ではあるが、有能な人間が自己の独創性を働かせる対象として解釈したことは、必ずしもユーモラスなものではないかもしれない²⁾。バジョットは常に書物に対してかすかな懸念を抱いており、それ以外の何も知らない人間を輕蔑していた。とりわけ、彼は純粹に文学的職業に対しては、大いに懷疑的であった³⁾。

しかしながら、このような偏見は根が深いものではなかったと私は思う。もしバジョットが一時的な疑念にもかかわらず、文学の大いなる不変の価値を心のうちではっきりと確信していなかったならば、確かに彼は書物と作者にこれほど関心を示さなかったであろうし、著作にこれほど多大なエネルギーを費やさなかったであろう。恐らく、彼は批評それ自体よりもむしろ、当時の雑誌の形態とその雑誌の読者達に絶望していたのであろう。彼は世間から隔離された批評家よりはるかに、書物を読む莫大な数の、ものを考えない実利主義者達の世界が与える圧力を感じていた。大部分の読者は無教養で非知性的であることを彼は認識していた。疲れて、努力する気にならないときに、彼らは読書を始めるということ、聞きたいと思うことを語ってもらいたがっていること、ジャーナリスティックな批評家達が彼らに強いているということを彼は知っていた。そのような読者達に自分が呼びかけ、そのような批評家達を相手に戦っているのだと承知しながら、バジョットがその評論の中に採り入れている厄介な問題全てに対して時に弁解的になるのは当然である。だが、これらの弁解は永続的な価値をもつ批評に対する彼の現実の態度を示していると解するべきで

はない。ジェフリーの評論については彼はこう述べている——「あわただしい生活の中ですばやく書き上げられたこのような論文を、ゆっくりと、しかし、恐るべき熱意でもって人類を教化しようとしている賢人の精密な労作を批評するのと同様に批評すべきではない。限られた数のものが永遠を志向し、多数のものは有限の時を志向するものである」²⁾。パジョットの脳裏にあった『賢人』とは、アリストテレスであったにちがいないことはほぼ確実である。そして、たとえアリストテレスがある種の悪意をもって描かれているにしても、少なくとも彼が人類を教化し、『永遠を志向』したことは認められている。事実、『ワーズワース・テニソン・ブラウニング』という評論の中で、パジョットが当時の芸術上の混乱を少なくともいくらか浄化しようとして、その手段とすべき根本的原理を求めてアリストテレスに向ったとき、その古代の批評家の不朽の名声は、少し干からびてかび臭くなっているとはいえ、輝やかしいものであると感じられたに相違ない。

パジョット自身の実践が、その理論よりもいっそう批評を推奨している。彼自身の評論は、著作についての著述、論文に関する論評の単なる寄せ集めでないことは確かである。むしろ、彼は厩大な書物のおびただしいページを引き裂いて、その背後の生身の作者を読者に見せてくれる。ギボンに関する評論などは、退屈すぎて楽しくないとか、あまりに限定された特殊なものであるために、独自の面白味に欠けるということはない。幅広い世俗的英知という清新な風がそこを吹き抜けている。それは思考し、活動する人間の才気と機知に富んだ食後の卓上演説であるが、非公式に語られたからといって傾聴に値しない訳ではなく、また、細心の注意によって鋭敏にされた慎重な精神の産物ではなくして、楽しむことによって活気づけられる機敏な精神の産物であるという理由で、洞察力の鋭敏さ、奥深さが足りないということもない。

パジョットは「批評の能力は、詩の能力とほぼ同じ位、特殊な独特なものである」との見解を表わしているが、その見解を説明してはいない。彼がありきたりの平凡な意見以上の考えをもっていたか否かを述べるのは不可能である。批評の究極的目的について、彼は明快な意見を有している——「もし次のペー

ジでわれわれがあら捜しをし、欠点をあげつらうとするならば、批評家の任務は批評することであり、著者に謝意を表することは彼の任務ではないということ、彼は賛辞を呈するよりもむしろ、一つの評価を試みなくてはならないということが記憶されるべきである³⁾。それ故、批評の目的は鑑賞ではなくして、判断である。

批評における判断とは何を意味するのであろうか。書物の判断に力点をおく批評は、書物が共通にもち、比較が可能な種々の要素を探り出さねばならないことは明白である。批評は首尾一貫した、信頼に足る判断を下すことをめざそうとするものであるから、原理と基準を開発しなくてはならない。それは人情と共感にあふれた判断を下したがるものであるから、世間一般の趣味に敬意を表わして従わなければならない。それは知的な人間の承認を受けるような判断を心がけるものであるために、その全般的な理論と実践において、知的な人間の間で一般的にみられる諸特質に訴えるものではなくてはならない。要するに、印象主義的な批評が特殊な、はかないものを強調しがちであるように、公正な批評は人間の経験における共通の、永続的なものを強調する傾向がある。勿論、バジョット自身は公正な批評家としての傾向を示している。彼は大多数の教養ある人間にかなり一様にみられると信ずる鑑識力および、多年にわたって広く支持されてきた人生と文学に関する理論の中に包含されている基準に従って、判断している。

しかしながら、彼のような型の批評家には珍しいことに、彼は芸術作品を評価するだけでなく、それを理解することにかかわる様々な問題への関心を示していることは称賛に価する。とは言え、この問題に関する彼の概念は、彼の思想の鋭敏さよりもむしろ、彼の見解の幅広さを立証するものである。一例として、彼はこう記している――

形而上学においては、恐らく鑑識力と判断の両方は、『精神の安定』と称されるもの、すなわち真の受動的な力、つまり、人生についての印象であれ、芸術についての印象であれ、成すべきことを全て果たし、精神にその完全なタイプをはっきりと刻み【つけてしまうまで、印象という流れを『待つ』能力を含んでいるのであろう。不当な

判断や鑑識力不足は共にあせりすぎである。どちらも性急なあまり、イメージをぼやけさせてしまっている³⁾。

このような理論は、ジェフリーのような偏狭な原理に基づく批評家や、ジョンソンのような過激な偏見を抱いた批評家にとって格好の警告として役立つであろうが、批評のプロセスに関する正確な記述とは考えられない。公正な精神は、即座に一般的な原理に従属させられない現象のみに判断を下すことを差し控える傾向がある。公正な精神は、時が要求するまで最終判決を遅らせることはあるかもしれないが、見慣れたタイプの書物、見慣れたタイプの人間を、研究するように、判断する。

別の箇所で、彼はこう記している——

想像力から創り出された作品を批評する唯一の方法は、それが読者に——いずれにしても批評するものに——与える効果を述べることである。そしてこのことは、有力な例証、適切な比喩、更に恐らくはわずかな誇張によってうまく説明されるにすぎない。その仕事は、まさしくその性質上、容易なものではない。詩人は批評家の空想力の中にある像を描いてみせ、批評家はある程度までそれを紙面に写しとる。彼はそれについて所説を述べる前に、それがいかなるものであるかを語らねばならない⁴⁾。

この文章は明らかに印象主義的な響きをもっている。批評家は詩人が空想力に『ある像を描いて』くれる間、受動的なままではいなければならない、それから『有力な例証、適切な比喩、更に恐らくはわずかな誇張によって』その像を描かねばならない。これに類似した意見が、ウォルター・ペイター (Walter Pater) とオスカー・ワイルド (Oscar Wilde) の著作の中に散見される。現代の印象主義者である J・E・スピングァーン氏 (Spingarn) はこう書き記している——「芸術作品を前にして感動し、その感動を表現すること、それが印象主義的批評家にとって批評の役割である」⁵⁾。しかし、当の感動の性質に関して、スピングァーンとバジョットでは根本的に意見を異にするであろうと私は思う。スピングァーンは新奇さ、目新しさを求める果しない探究に乗り出す。バジョットは芸術の根本的原理と、人間性における不変の特性を発見することに関心がある。スピングァーンは人間の心理における大多数の要素を強調する。バジョットは大多数と

個との適切な調停を試みる。スピンガーンは同一の書物であっても個々の人間に全く異なった感動を招来するものだと言ふべしであらう。バジョットの方は、一般的に言つて、同一の書物は同一の感動を招来する傾向があるという意見であらう。バジョットの言によれば、読者もしくは批評家は芸術作品を前にして単に『感情を表面に表わす』ようなことはすべきでない。彼はまた『その詩がいかなるものであるか』、全体として、その詩はそれを読む全ての人間にとっていかなる意味をもっているかを慎重に熟考した上で述べねばならない。最後に彼はそれについて見解を述べ、言ひ変えれば、ある判断を公表しなければならない。しかし、たとえバジョットが印象主義という非難を免れても、正確さを欠く言説、鑑賞と判断を人為的に区別しているという批判は免れない。それに、前ページの引用が序論となっている『失樂園』に対する批評が一例と考えられるならば、彼の理論は自らの実践の産物でもない。彼は批評を12行も書き進んでゆくと、必らず主たる判断を暗示してしまう。一つの判断を下さずに第2パラグラフに筆を進めることはない。批評家が読者の空想力にある像を描こうとするとき、批評家はすでに自己の判断を——何か形成すべきものをもっているならばであるが——形成してしまっているのである。そしてまた彼は自分の書く批評にそれを長く遠ざけておくことは出来ないであらう。

鑑識力という重要な主題に関するバジョットの折り折りの言及は、表明されているというより暗示された形で、彼の批評が依拠している究極の原則をいっそ明らかにしている。鑑識力についての彼の概念は、完全に述べられたことはどこにもないが、本質的には『文学伝記』(*Biographia Literaria*)の中でコールリッジが表現したものと同一であるように思われる。後者は著者がいかに自己の文体を規制しようかと修辭的に問い、次のように答えている——

もしその芸術が『良識』によって支配、適用され、習慣によって直観的なものにされてしまったとしたら、われわれが過去に意識していた推理力、洞察力、結論を代表し報いるものとなり、『鑑識力』という名を獲得するような、その芸術に最も関連している、物質的、精神的事実に関する知識によってである⁹⁾。

現代の浪漫派の文学のもつ種々の欠点を熱心に研究したバジョットは、優れた

鑑識力のみならず悪しき鑑識力も、以前の努力と訓練の結果であると強調している。「意志は鑑識力に対して間接的ではあるが、大いなる力をもっている」と彼は語っている。感覚が麻痺した兵士が血に飢えるように、もし十分に望めば、人は風変りで奇怪なものに対する好みを身につける。従って、人々はブラニングの詩ですら美しいと考えるようになるのである。現代のイギリスの読者達は、ただ芸術の健全なる原理を修得し、優れた文学を研究し楽しむ際にそれらを適用することによって、そのような野蛮さを一掃することが出来る⁷⁾。

書物に関連している限り、私はすでにバジョットの原理と基準について論じてきた。しかし、偉大な書物は偉大な精神の詳細にして謎めいた指標、記録でもある。最も崇高な局面においては、批評は天才の研究である。『人間シェークスピア』(“Shakespeare—The Man”)を執筆中に、バジョットはこう述べている——

著者の性格に関してその著作から何かを推論することが出来るかを疑っている極端な懷疑論者達がいる。しかしながら、人々はその書物を書き著すための馴れた蒸気機関をもっているわけではないのは確かである。そして、もしそれらの書物が実際にある人物によって書かれたのなら、彼はそれらを書くだけの力量をもった人物であつたにちがいない。彼はそれらの書物が表現している思想の持ち主で、それらが内包している知識を身につけ、われわれが読みとる文体を所有していたに相違ない。それらを発見するのが困難であるとすれば、批評する側に責任がある。自分の読んだ著者について全く無知である人間は、自分の見てきた著者について多くを知ることはないであろう⁷⁾。

書物を判断するための原理を修得している批評家は、恐らく、作家を評価するための基準をもっているであろう。このような基準をバジョットは全くどこにも定義していないが、あらゆるところで暗示はしている。例えば、クラフは真実をあまり複雑で不確かなものにしており、マコーレイはそれをあまりに単純、気楽なものにしてしまっていると語っているとき、シェリーの想像力があまりに奔放で気まぐれであるのに対して、サッカーのそれはあまりに直接的、平凡な世界に縛られているというとき、ギボンは自己満足的すぎると皮肉を込めてほのめかし、バークはあまりに感情が激しすぎると言明するときなどである。明らかに彼の脳裏には、私がすでに描いた、あの幅広い視野をもち多面的で世

情に通じた穩健な人間像があったのである⁸⁾。彼が標準とする人間は、『均衡のとれた天分』、『生命力にあふれた中庸の精神』をもち、全く迎合することなしに、後代の人々の称賛を得、書物や作家に対して知者らしい不信感を抱くことによって、最高の文学的力量に達する作家である⁹⁾。

そのような人物は著者を判断するための一つの基準としてのみならず、批評家を真似る際のモデルとしても役立つものである。恐らくバジョットは次のようなロンジナス (Longinus; ギリシアのプラトン派の哲学者: 訳註) の自問を発したことは、一度もなかったであろう——「もしそこに居合わせていたなら、ホーマーは、またはデモステネス (Demosthenes; アテネの政治家で雄弁家: 訳註) はいかにして私が書いたものに耳を傾けたであろうか、あるいは彼らはそれからいかなる影響を受けたであろうか」¹⁰⁾。バジョットがそのような極端な英雄崇拜に走ることは殆ど不可能であっただろう。しかしながら、古典的、人文主義的原理をあるとき激しく擁護して、浪漫派の芸術は『ペンキを塗られた影像』のようなものであると発言してしまった。浪漫派の芸術は「単純な彫刻につきもののあの不可分の簡素さが欠如している。つまり、その簡素さとは魅力的な細部を台なしにするように支配し、われわれ自身の自己満足に損傷を与え、たとえわれわれが満足であっても、われわれよりも優れた人物が満足するかどうか疑わせるものである」¹¹⁾。ホーマーとアリストテネスが彼の絶対神ではなくても、少なくとも彼らは守護神の側にいるのが認められる。

文学の最終的な試金石となるものは、言うまでもなく、時間と最終的な審判である後代の人々である。「一人の迷い子の学童が、『異端者』 (Giaour) や『海賊』 (Corsair) を熱烈に賛美している状態で発見されるかもしれない……だが、『真の』後代の人間、つまり過去の文学を静かに学ぶ者は、彼らについて読んだり考えたりすることは決してない」¹²⁾ とバジョットは述べている。恐らく、静かに学ぶ者は実際、真の子孫であろう——二流の文学にとっては紛れもなく。事実、疲れを知らぬ注釈者達は今日、偉大な作家達を生きたまま葬り、死体を掘り出すという物騒な傾向を示しているが、どの時代においても彼らははるか昔に亡くなった二流の作家達に同情的な、しばしば差別的な関心を抱いている

ようにみえるのは、もっともなことである。そのような作家達はそれにふさわしい場所と不滅性を絶賛と酷評の集積の中に見出すであろう。そして、疑いもなく、全ての文学は同様にして審判を受けるのである。しかし、広義の意味においては、真の子孫には静かに学ぶ者のみならず、迷い子の学童も含まれる。偉大な文学は一つの伝統となる。それは学童が読みたいと思うもの（今日、彼が何かを読みたいと思うと仮定すればのことであるが）ではなくして、彼が読むのを余儀なくされるもの、生徒がざっと読み、教師が注釈するもの、にぎやかな世界が忘れ、静かな世界が記憶しているものである。偉大な文学は静まりかえった教室の中にその最も確かな不滅性を見出すものである。

全体として、文学と批評に関するバジョットの理論的概念を概観してみると、われわれはそれらの首尾一貫性に強い印象を受ける。批評の中に偶然漏らされた、大部分は脈絡のない、何気ない言葉が、少なくとも大要においては実に巧みに筋道立っていることに驚かされる。バジョットの他の面における全ての一貫性と同様に、この首尾一貫性の根本は究極的には、穩健で多面的人間という概念の中に存する。この人物像は優秀で望ましいもの全ての基準として、バジョットの思想のまさに核に存在しているために、私は何度もこの人物に帰ってゆかねばならない。最良の文学は、人生との接触において広範で、その思想と調子の点で道德的、真面目で、その文体において気品と抑制を有しているべきである。何故なら、読者兼批評家としての穩健で多面的人間は、そのような文学を好み、作者としてそのような文学を創造するからである。このことがバジョットの文学理論の究極的論理、意味するところである。

第7章 原文註

- 1) "Edinburgh Reviewers," ii. 51; "Sterne and Thackeray," iv. 230; "Wordsworth, Tennyson, and Browning," iv. 280.
- 2) "Gibbon," ii. 157; "Shakespeare," i. 228; "Edinburgh Reviewers," ii. 74.
- 3) "Grabb Robinson," v. 58; "Macaulay," ii. 89; "Physics and Politics," viii. 142-3.
- 4) "Milton," iii. 208.
- 5) *The New Criticism*, p. 3.

6) ii. 64.

7) "Wordsworth, Tennyson, and Browning," iv. 308, 307, 414; "Shakespeare," i. 218.

8) Bagehot, "Clough," iv. 117-18; "Macaulay," ii. 122; "Shelley," ii. 218-20; "Sterne and Thackeray," iv. 257-8; "Macaulay," ii. 112-13; "Milton," iii. 200; "Gibbon," ii. 155-6.

9) "Macaulay," ii. 96-8.

10) *On the Sublime*, xiv.

11) Bagehot, "Wordsworth, Tennyson, and Browning," iv. 292, 267.

第8章 ハズリットからの影響

バジョットが古典主義者の理論を採用していたものの、浪漫派の実践を称めたたえたことは、意味深いことである。批評家として著述家として彼が憧憬した姿の多くを、彼はウィリアム・ハズリットに関する評論の中に見出していたように思われる。

オーグスティン・ビレルとツァイトリン (Zeitlin) 教授は共にこの恩義を指摘した。そして、『ヘンリー・クラブ・ロビンソン』("Henry Crabb Robinson") という評論の中で、「ハズリットはチャールズ・ラム (Charles Lamb) よりはるかに偉大な作家である。これは私が今もなお保持している忌憚らない意見である」¹⁾とバジョット自ら、確信を記している。1867年に着手されたと伝えられているハズリットに関する評論は、不幸なことに保存されていない²⁾。しかし、この影響の事実は外的証拠によって裏書きされる必要は殆どない。承認つきでまたは承認なしで引用され、言い換えられ、改作された年長の作家 (ハズリットのこゝ：訳註) の批評と考えは、バジョットの評論の至る所に見出すことが出来る。

明らかに、称賛者の目を通して見たハズリットの大きい美点は、彼が全く生き生きとしているということであった。彼は文学の退屈さと無味乾燥さに対抗する理想的人物であり、体験型の性質をもった批評家の典型であった。彼は「最高の作家達の文体と感情を知悉している」本の虫、無益な言葉を青白い顔で紡いでいく人間ではなく、「自分自身の目と耳を使うことにかけては人並みはずれた」人間であった³⁾。彼は人生からと同様に書物から退屈な術学趣味ではなく、知識と力を引き出す人間の優れた見本であった。彼の人生が波乱の多

い人生ではなかったことや、『ある確固とした立場』を占めたことは一度もなかったという事実、彼が夢想家で孤独を愛する、一人ぼっちの気むずかしい男で、他人の才気煥発さに鈍感で冷淡であったということ、あまりに内向的で感受性が強く不器用であったので、たとえ望んだとしても、世間である役割を果たすことは出来なかったということは真実である。しかしながら、彼の人生と態度の性質は、彼の精神のエネルギーと彼の著作の質の指標とはなっていない。彼はもう一人の人間が相手をノックアウトするほど激烈に拳闘の懸賞試合を描写している。当時の政治についての彼のコメントは、時として偉大な政治家の回想録を、また一方では、革命の殉難者の文学遺稿集を思わせる。事実、もし彼がこの世の積極的生活よりも書物の方をいっそう好むとしたら、それは彼がこの世をそれほど愛さなかったからではなく書物の方をいっそう愛したからであった。何故なら、彼が他人の意見および著作の分析や批評に費したほどの情熱と雄弁さ、鋭敏さと洞察力でもって、詩あるいは散文に人生を綴った作家は殆どいないからである。

別の点で、ハズリットはバジョットが選ぶのを予期しうるような、まさしく偶像——粘土で出来た足をもつ偶像であった。彼はいくつかの重大な欠点を所有していた。彼の知性には抑制という原則は全くなかった。彼は真理を俊敏、情熱的に観察したが、情熱が誤った水先案内人であって、彼の観察が間違っていたことが判明したときに、真面目な千里眼を叱咤し、判断を矯正することは不可能であった。実際、思考と感情は不可分であった。バジョット自ら言明しているように、ハズリットはある種の苦渋に満ちた精神から全てのものを観察しているように思われた。そして、世間と彼との間に激しい摩擦がおきると、彼は不合理な激怒に駆られるか、空想という不思議の国に不機嫌にひきこもってしまった。要するに、彼は借用するのに理想的な作家であって、性急で創造力に富み、熟考を要する賢明な提案と、修正を必要とする才気ばった理論に満ちていた。さらに彼は冷静な批評家が誉め称えるようなタイプの作家であり、複雑で誤謬にあふれ、診断すべき微妙な欠陥や解釈すべき奇妙な連鎖を多くもっていたが、それらはひどくイギリス的なものであったために、バジョットに

とっていっそう魅力的であった。何故なら、彼の全てのフランス革命的考えにもかかわらず、ハズリットは結局のところ、イギリス・トーリー党員 (Tory 王党派) の見事な見本であったからである。彼は急進的な原理を主張したが、一地方地主として騎士党員 (Cavalier) の様々な偏見を勇敢に、猛烈に、無分別に擁護したであろう。彼は心底はたいそう保守的な人間であったので、彼が述べる物議をかもすほど先鋭的な見解も、書物のページにおさまると古めかしく常識的であるようにみえる。文芸批評家として彼は時代という試金石に耐えてきた健全な古典的書物を愛好し、バジョットが共感をこめて記述しているのに従えば、典型的トーリー党員が昔ながらの習慣と祝宴を遵守するときと同じ熱心さで、日々楽しみながら絶えずそれらの書物を繰り返し言及していた⁹⁾。要約すれば、彼は話題にしたり、書物の題材にしたり、借用したり、称賛すべき人物——英雄崇拜以外の全てに適した人間、バジョットの心に適った人間であった。

最初の出版物のいくつかに最も顕著に現われているように、ハズリットからの影響はバジョットの初期および中期の殆ど全ての文芸評論、評伝の中において著しく目立っている。さらに、後期に書かれただけではなく、文学本来とはかなりかけ離れた主題について書かれている、『イギリス憲政論』のような作品においてすらも、模倣のあとが顕著にみられる例によっても、その影響は指摘される。修業期にこれほど強く広範囲で永続的な影響は、明らかに深く浸透しているに相違なく、事実、その影響は単に特殊な観念について語ることとか、文体や様式を真似ること以上の多くの点に存在している。恐らく最も特徴的な文芸上の特質と思われるものにおける、これら両作家の間の顕著な類似点、彼らの趣味、共に心理的解釈を強調している点は、容易に測定しがたい影響を暗示している。

バジョットは借用はしたが、模倣はしなかったということは殆ど述べる必要がないことである。ハズリットをきわめて精密に真似たものや、ビレルが注意を促しているところのサウジーの個人的習慣に関する記述ですらも、明白な個性のしるしを帯びている⁵⁾。さらに、大抵の場合、バジョットは借用するといふよりもむしろ、訂正、修正し、拡大、発展させた。ハズリットが怒りの激情

に駆られて誇張し、混乱させたものを、バジョットは思慮とユーモアでもって和らげ、体系化した。より簡潔で詩的な作家であるハズリットが、叙情的な雄弁の進むままに警句の中に暗示したり、あるいは短評の中にほめかけたり、まき散らしたりしたものを、バジョットは注意深く寄せ集め、入念に練り上げ、5、6ページの中にその可能性の限界まで解説した。ハズリットが一個人として観察したものを、バジョットは一つのタイプ、または一つの心理的法則に一般化した。サー・ウォルター・スコットには魂が欠如しているとハズリットは熱っぽく主張している。バジョットはその示唆を理路整然とした批評に変えている⁶⁾。シェークスピアの心は「その内部に思考と感情の一つの宇宙を含んでいる……彼は一個の人間としての個性のみならず、万人の特性を具有していた」とハズリットは雄弁に言明している。バジョットはこの見解をいっそう特殊に応用し、幾分平凡な厳密さで、シェークスピアの心はゲーテ、キーツ、スコットを内に秘めていると説明している⁷⁾。ハズリットはブルーム卿の性格についての短評を行い、彼の並はずれたエネルギー、義憤、多面性を強調している。バジョットは同じ特質を選び出し、他にいくつか付け加え、ブルーム卿という名の典型的扇動家を抜きん出た模範例と描写している⁸⁾。ハズリットはジェフリー卿の冷静な常識と穏健な楽観主義に賛辞を送っている。ホイッグ党員の性格の根底に大変良く似た傾向をバジョットは見出している⁹⁾。このような証拠はその思想のまさに道具であるバジョットの最も重要ないくつかの原理の発展のみならず、彼の心理的洞察力、全ての知的問題に対する心理学的アプローチの成長にいかんハズリットが寄与したにちがいないかを暗示している。

バジョットの文体の最も魅力的な特徴の一つである享受(gusto)の問題は、長い間それを扱うべき適切な人間の欠乏を経験してきた。それは知的な人間——そのような人間がこれまで幾人か扱ってきたが——ではなく、勇敢な人間、つまり、平凡ではあるが必要な意見を発表する勇気をもった人間を要求する。私がその仕事を引受けようと思う。語源的には、“gusto”は言うまでもなく、スペイン語、イタリア語の“taste”を表わすにすぎず、フランス語の“goût”と同様、“taste”や“relish”を意味するラテン語の“gustus”にさかのぼる

ことが出来る。そして New English Dictionary に記載されている定義と説明から判断すると、その語は今日、趣味 (taste) という語に対して与えられたのと大変よく似た意味をかつてはもっていたに相違ないことが判明する。なかでも、双方の語は次のようなことを意味したと思われる——まず第1に、自然または芸術における、ある対象への特殊な好み。第2に、これらの好みを発展させてゆく精神の能力、つまり、知覚、識別し、楽しむ能力である。われわれは見事な家具に対する趣味をもち、それを心から楽しむことが出来るであろう。見事な家具はわれわれの趣味に適い、われわれはそれを心から楽しむことが出来るであろう。しかしながら、趣味 (taste) という語がこのような使われ方と意味を保っているのに対して、享受 (gusto) は特に19世紀の初頭から、原語の一方の使われ方において好みという意味と、もう一方の用法において知覚と識別という意味を失う傾向があった。従って、その最も広義の意味で、最も簡潔な辞書の定義に従えば、gusto という言葉は楽しむこと、あるいは楽しむ力といった程度のことを意味しているように思われる。すなわち、New English Dictionary の表現によれば、「思考または行動の中に表わされた激しい好み、または喜び；熱情」である。それ故に、文学における享受 (gusto) を定義するという問題は、書くことの喜び (enjoyment) の原因と証拠を分析するという問題である。

大部分の作家は享受すること (gusto) を、あたかもそれが大変単純なものであるかのごとくに挿話的に言及している。明らかに、彼らは陳腐な所説という恐るべき迷路を凝視し、たじろいできたのである。そのからまりあった灌木のような文体の内部の奥深いところで、セインツベリーは享受を「文学の美しさを情熱的に探究すること、それを陶酔的に楽しむことである」という大胆な意見を述べ、P・E・モア氏 (More) は「理解力に基づいた堪能する力」と性急にその言葉を定義している¹⁰⁾。しかし、ハズリットが『ウィリアム・ギフォード殿への書簡』(“Letters to Mr. William Gifford, Esq.”) の中で言うところの享受は、文学の美しさの情熱的探究や、『理解力に基づいた、堪能する力』として説明されるであろうか。

ハズリット自身は自己の定義の中で、享受の積極的な面と称されるものに限って考察した。「芸術における享受する力は、何か対象を明確にする力、あるいは情熱」と彼は述べている。彼の説明は彼が現象を定義するよりも、それを理解する方がいかに巧みであるかを立証している。

シェークスピアの戯曲がもつ、莫大な量の創意工夫は、彼の享受する力に由来している。彼が喜んで示す力は、強烈ではなく、散漫である。彼は何かを強硬に主張することは決してない。ミルトンは偉大な享受する力をもっている。彼は二度繰り返して、取り組む。つまり、その主題と格闘し、余すところなく究めるのである。彼の想像力は、彼が描写する事物と、それらの事物を描く言葉に執念深く付着しながら、対象を二重に味わう¹¹⁾。

シェークスピアが『喜んで示す』力と、ミルトンの想像力がその対象に対してもつ、『二重に味わう力』について言及したときに、ハズリットは明らかに次のことを暗示していたのである。すなわち、享受(gusto)の根底にあるのは、楽しむこと(enjoyment)であり、本質的には享受とは力や熱情ではなく、創作時に力や情熱を行使することにおける強烈な喜びである。そして、その喜びとは著者をしてその論点を何度も強調させ、その主題を徹底的に究め、独特の喜びをもってその概念とそれらを表現する言葉を長々と述べたてさせるものである。さらにその上に、ハズリットはその主張の中で享受する力は対象の意味を明確にすると言明しているが、その所説の中で彼は享受する力が対象を強調するとも示唆しているのは明白である。そして、これらのことは紛れもなく事実である。ミルトンは簡潔な文章でセイタンを塔に、または、もやにかすんだり、皆既食によって暗くされた太陽に喩えている。彼はセイタンの威光失墜をあくまで暗示しているのであって、明白に示すことはしない。

人間は全て自己の得意なことをするのに、何らかの喜びを感じるものであるから、ある意味では、優れた作家は全て楽しみながら著作活動を行っていると言える。フローベルでさえ、*de* の繰り返しという、いとうべき構文をとることを迫られたとき、破局を回避出来たのちには、疲労のうちにも安堵の興奮を感じたに違いない。だが、われわれがここで語っているのは、独特の享受する力

をもった作家達についてである。われわれは不安定で、つかの間の享受する力ではなく、強力で持続的な享受する力にかかわっているのである。それでは、そのような享受する力の原因となるものと表面にあらわれた現象とは、いかなるものであろうか。偶然的な要素を度外視すると、その原因は次の二つである。すなわち、それが批評すべき書物であれ、発展させるべきテーマであれ、その主題を著者は享受することが出来、かつ、考え、書くという行為自体を楽しむことが可能だからである。大方の場合、彼が一方を享受出来れば、他方も味わえるであろう。そして逆に他方を享受する『のであるから』、一方をかなり堪能するであろう。著者はその主題が重大で、普遍的に興味を駆きたてるものであり、奇妙なほど彼の才能に符合し、彼の心の中で楽しい記憶と結びついているために、また元を辿れば、これらの理由とそれ以外のずっと多くの異質の理由の結合ゆえに、その主題を享受する。同様に、著者はその主題が自己の目にはある独自の価値をもつという理由も一部あるが、恐らくもっと大きな理由は、自らが書くということ自体が卓越して強力であるか、個人的要素をもったある現実的もしくは幻想的な性質を帯びており、それが彼に非常な喜びを提供するというこのために、創作という行為の中に喜びを見出すのである。ハズリットは『力と情熱にあふれて』書くことを楽しんだ。ラムは風変りに描くことに喜びを見出した。故セイントベリー氏は、私が思うには、奇怪な描き方を楽しんだことだろう。

享受の兆徴と現象は、動機を反映するようなものである。生氣、卓越性、聡明さ、稀有性は全てその表示であるが、享受の特有の兆徴は、主題が要求する以上の内容の豊富さである。作者はその論点を長々と味わうように詳細に記述する。彼は可能な限り全てのやり方であらゆる表現法を駆使してその論点を表現し尽すまで、それから離れようとしない。彼は常に変らぬ喜びをもって、気にいった話題、概念、冗談、好みの言葉、語句を飽きることなく繰り返し、それらの中に別の意味、または適用が潜在していることを常に、あるいは殆ど常に発見している。しかし、彼は常にその繰り返しを楽しんでいるわけではない、またその熱中ぶりは分別のあるものでもない。享受は作家の才能を白日の

下に曝し、従って、表現すべきものが何もないときに、大いなる雄弁さが時として作家にもものを書かせ、決して信じなかったであろうような多くの事柄を他人のみならず自分自身にも確信させたのであろう。

しかしながら、精神の享楽癖について、その長所と短所をハズリットほど明確に提示した作家は恐らくいないであろう。彼は思わずつばが出るようなやり方で、書物と人間について書くことが出来、実際、優れた著作を愛する能力を授けられた者は、ギフォード氏 (Gifford) の殺害に立合って、必らずその鼻孔に満足な血のにおいを感じたであろうと思う。しかし、ハズリットはほぼ同じ位の残忍さでもって影を殺害することが出来た。恐らく、情熱的精神の致命的な欠点は、情熱を楽しんでしまうことであろう、そしてこの欠点を彼はメロドラマチックな洗濯女と共有した。情熱が非常にもてはやされる場所では判断力は存在せず、真理は高潔さをもたなかった。ハズリットのそのときどきの気分が激賞や酷評に適合するのに従って、ワーズワースとコールリッジは彼の評論の中で共に両極端に分かれているのがわかる。さらに不幸なことに、彼の怒号は単に悪意に満ちていたり、自慢げであったりするばかりでなく、ただ内容空疎であって、もうこれ以上何も語るべきものがなくても延々と続いていたりする。例えば『時代の精神』(*The Spirit of the Age*) ではスコットに関して多くの有効なことを発言しているが、王党主義 (Toryism) に対するすさまじい反対を数ページ述べて結論としている¹²⁾。彼の享受する力が原因となった無茶な言行のうちで最も痛快な一例は、恐らく『リア王』("King Lear") とサー・ウォルター・スコットの作品を対照させている次の一節であろう――

時間、場所、状況と無関係に、それ自体の重さと動きにささえられ、習慣というてこにささえられたり、風変りで古風なドレスが点在したり、グロテスクな背景やさびついた甲ちゅうによって引立たされるのではなく、単なる付属品やアクセサリーが無視され、ただ情熱の精髓と想像力の核心が発見される場所で中空に回転している巨大な『球状をした』悲しみである、この種の悲劇をわれわれに示しているサー・ウォルターに私は会ってみたいものだ¹²⁾。

われわれは戦いの挑戦を叫んでいるヘクトール (Hector; ホーマーの詩 *Iliad* に

出るトロイ戦争の勇士：訳註）と同時に、兄を自慢している幼い少年を思い出す。

ハズリットの言う享受する力とバジョットの言う享受する力の間には、質と量双方に関する相違がある。両方の作家には文学の美に対する同一の熱狂的思い、心理学的洞察を発見することへの共通のわくわくするような喜び、透徹した思想と精力的な執筆活動への共通の歡喜がある。だが、一方の享受する力が山火事、慣習無視的なものであるのに対して、他方のそれは明らかにプロメテウス以後の炎に譬えられ、合理的にマッチ箱と消火器を使用する傾向がある。ハズリットの享受する力は荒々しく、猛烈で、全てを焼き尽くすほどである。バジョットのそれは温和、繊細で、適応力があり、文芸批評の中で精彩を放ち、経済や政治に関する著作のいかめしいページの中では、弱々しく威儀を正すようになる。ハズリットほどの天分や生き生きとした詩的想像力には恵まれていなかったが、バジョットは同時にハズリット以上に良心的で抑制がきいた人間であった。享受する精神は時には彼を不注意や平凡さに至らしめたが、誇張に至ることは稀であった。

彼は雄弁という才能を重い責任と考えたが、それ自身が目的の単なる大言壮語は彼を驚愕の思いで満たした。彼は自分が巧みに書いているときがわかり、識別力を伴う享受する力を発揮する。彼の享受する力は感情的なものというより思考力にかかわるもので、詩的に高揚した気分よりもむしろ知的聡明さを表わす文章を伴っている。叙情的文体をバジョットが試みることはめったにないが、勿論、ハズリットほど成功していないし、それ故、あまり味わい深いものではない。さらに、時としてバジョットの享受する力は彼の『詩』の卓越性が保証するように思われるものを凌駕している。『神秘的感覺』によってワーズワースの自然崇拜の背後にある心理を説明しようと試みて、彼は次のように記している――

われわれはその愛する者達の顔を凝視し、彼らの瞳というあけぼのの中に生命の光目や口の動き、それらの生命力の奔放さを観察し、変わりゆく輪郭の中に变化する兆徴を追ってゆくように、また声の調子に沿って魅力とスリルが伝わってゆき、単なる一つの言葉で心につきまとうように、声の調子が耳の中で漂っているように思われるよ

うに、震える空想力が語られぬ言葉を聞くように、自然の中では神秘的な感覚が山の動きや波の力、岸辺の長く白い波頭の意味、蒼天の思い、軽快な光の中にあふれる魂、広大な虚無における無限の存在を見出す¹²⁹。

この文章は、一步間違えばセンチメンタルなものになりかねず、私が述べた通り、バジョットの享受する力とは本質的には知的な『散文風の』享受する力である。それは心理的分析、逆説と警句、ユーモアと逸話を表わす文章の中で最も強味を発揮するように思われる。ワーズワースの自然信仰を概説したあと、ジェフリー卿のそれに対する反応をバジョットは次のように描写している——

たとえこうであっても、ワーズワース氏がこの種の宗教を説き、ジェフリー卿がそれを一言も信じていないことは確かである。彼の冷静で鋭敏、沈着な精神はその神秘主義に反発したのである。彼の探偵のような知性は、その神秘主義の明らかな誤謬発見に没頭した。彼は軽いユーモアで説教師（ワーズワース）の謹厳さを愚弄した。彼は明快さを好んだために、その主義のもつ不明瞭性が不快であった。精密さを好む哲学者（ジェフリー卿）はその主義の神秘的晦渋さに辟易させられた。ささいな欠点を見つけることは明らかに彼にとって不愉快なことではなかった。評論家のペンがこれほど辛辣に健筆をふるったことは稀である¹³⁰。

ハートリー・コールリッジについては彼は次のように記している——

彼が5才頃の時に、父親である形而上学者（S. T. コールリッジのこと）からであるのは確かだが、彼はなぜハートリーと呼ばれているかについて質問された。「どのハートリーのことなの？」と少年は答えた。「おや、ハートリーというのは一人ではないのかい？」「うん、多勢のハートリーがいるんだよ。絵のハートリー（ハズリットは彼の絵を描いていた）もいれば、影のハートリー、こだまのハートリー、幻のハートリーもいるんだ」。自分自身の腕をしきりにつかんで、まるで『シュタイとキャラクター』（“summject and ommject”）について考察するかのようになり、つまり絶望的なほど混乱していた彼が、後年、そのような難問に困惑させられたかは定かでない。もっか論評している評論は、人間の性格の詳細に関する多くの明敏な見解を含んでいるが、それらにはドイツの深遠さが欠如している。それらの評論は生存がいかにして可能であるかを論じていなければ、また、魂それ自体の純然たる特質を列挙してもいい。しかし、酔生夢死の彼の青年時代、壮年時代を考えると、ハートリーが前置きに述べた疑問を超克した——つまり、事実と現実に対する概念を正しく把握したかどうか疑わしい。これは無意味なことではない。注意すれば、この世の完全な、または不

完全な認識以上に、人々が意見を異にすることは無いということに気づくであろう。ウェリントン公 (Wellington) にとって外套は外套であった。「間違いは全くなかった」。それを信じない理由もなかった。そして彼はウォータールーの戦いの日の朝、いつもと変わることなく『ひげをそる』(それが彼の最大の功績であった) という完全な疑う余地のない信念を死ぬまでもち続けた¹³⁾。

逆説を享受する力は、バジヨットの出版された著作のうちの処女作である、『クーデターに関する書簡』("The Letters on the Coup D'État") の中に最も強くあらわれており、それらは思想、気質、文体の点でハズリットと最も密接な関連性をもっている。それらの主張するところは、私がすでに述べた通り、利発な国民は奇妙なことに自治能力をもたず、愚鈍な国民にそれが可能であるという対をなす命題に依存している。彼は無限の喜びで、これらのことを主張し、それらに言及するときは常にこの上もなく細心の準備をし、それらから離れるときは、必ず最も効果的な言葉、適切な解説、才気ばしった機知をこれみよがしに誇示する。政治上の悪徳としての知性に彼は大いなる道徳的憤激をもって激しく抗議し、愚鈍さを穏やかな保護者然とした宗教的熱情でもって賛美する。そして注目すべきことに、結果的には、健全な意見を単なる逆説のための犠牲にしていない。どちらかといえば軽快な衣装の下に隠れているバジヨットの原則は、最も強固で保守的なパーク流のものであり、ユーモアに満ちた誇張を差し引いた場合、フランスの状況についての彼の見解は、本質的には当時の一歩進んだ思慮深く経験をつんだ政治家の見解である¹⁴⁾。『クーデターに関する書簡』は健全さではバジヨットに劣り、同程度の享受する力をもち、才気煥発さでは彼に勝り、より威圧的な晦渋さをもった故チェスタトン氏が今日成し遂げた業績に匹敵する。

第8章 原文註

- 1) Birrell, *William Hazlitt*, p. 123; Jacob Zeitlin, *Hazlitt in English Literature*, pp. xxxiii, lxxii; Bagehot, v. 61.
- 2) Mrs. Barrington, p. 382.
- 3) Bagehot, "Shakespeare," i. 228, 239.
- 4) See pp. 170-1.

- 5) Birrell, Hazlitt, p. 123; Hazlitt, "Mr. Southey," *The Spirit of the Age*, iv. 269-70; Bagehot, "Shakespeare," i. 228-9. Compare also Hazlitt, "On the Knowledge of Character," *Table Talk*, vi. 308, with Bagehot, "English Constitution," v. 162-3.
- 6) Hazlitt, "Sir Walter Scott, Racine, and Shakespeare," *The Plain Speaker*, vii. 345; Bagehot, "Waverley Novels," iii. 70-1.
- 7) Hazlitt, "On Shakespeare and Milton," *Lectures on the English Poets*, v. 47; Bagehot, "Shakespeare," i. 233-5.
- 8) Hazlitt, "Mr. Brougham — Sir F. Burdett," *The Spirit of the Age*, iv. 318; Bagehot, "Lord Brougham," ii. 299-307.
- 9) Hazlitt, "Mr. Jeffrey," *The Spirit of the Age*, iv. 315; Bagehot, "Edinburgh Reviewers," ii. 62.
- 10) Saintsbury, *History of Criticism*, iii. 257; More, "The First Complete Edition of William Hazlitt," *Shelburne Essays*, ii. 74.
- 11) "On Gusto," *The Round Table*, i. 79-80.
- 12) "Sir Walter Scott," iv. 249-52; "Sir Walter Scott, Racine, and Shakespeare," *The Plain Speaker*, vii. 341.
- 13) "Edinburgh Reviewers," ii. 75, 76; "Hartley Coleridge," i. 190.
- 14) Mrs. Barrington, *The Servant of All*, i. 142.